

八王子市いのちの大切さを共に考える日



○ 校長講話（令和4年6月6日）

今日は、校長先生が子供だった頃のお話をします。

小学校6年生の夏休みのことです。学校の校庭で行われていたラジオ体操に、弟と毎日参加していました。

ある日、体操が終わって家に帰ろうとしていたら、「お姉ちゃん、お姉ちゃん、来て!」と弟に呼ばれました。体育倉庫の裏に行ってみると、段ボール箱に入れられた子犬が「クンクン」と鳴いています。小さくて、ビクビクしながらふるえている子犬をひと目見て、校長先生も弟も、「このままじゃ、かわいそうだ。」と思いました。

2人で箱を抱えて家に帰り、おうちの人に「絶対ちゃんとお世話をするから。」とお願いして、うちで飼うことになりました。小さいので「チビちゃん、チビちゃん」と呼んでいたら、子犬はいつの間にか家族の中で「チビ」という名前になっていました。

チビは、大人になったある日、5匹の子犬を産みました。冬の寒い日で、夜中に産んだので、家族の誰もそのことに気付きませんでした。

朝になって、子犬をペロペロ舐めているチビに気付いた弟は、5匹をバスタオルにくるんで、ストーブの前で温めました。チビは、心配そうに見ていましたが、残念ながら4匹は生き返ることはありませんでした。

校長先生と弟は、泣きながらおうちの庭に埋めて、お墓を作りました。お花をたくさん入れて、ドッグフードもたくさん入れて、「天国でまた会おうね。」と、約束しました。なんとか生き延びた1匹は、しばらくして、弟の友達の家にもらわれていきました。

それから何年か経ったある日、年老いたチビは、突然いなくなりました。朝ごはんをあげようとしたおうちの人、庭の犬小屋をのぞくと、空っぽになっていたのです。その頃、校長先生はおうちを離れて東京で大学生活を送っていたので、チビがいなくなったことをおうちの人からの電話で知りました。

どこかでお散歩しているのではないかと、家がわからなくなって迷っているのではないかと、毎日毎日おうちの人たちは探してくれました。どこかで亡くなっているのなら、せめて4匹の子犬たちと一緒に墓に入れてあげたいと思いましたが、結局チビは見つかりませんでした。今思えば、自分の最期を誰にも見られないように、迷惑をかけないように、みんなを悲しませないように、静かにいなくなったのかなあ…と想ったりします。

チビが元気だったころの写真が1枚だけあるのですが、それを見ると、今でも悲しくなります。家族の1人だったチビが突然いなくなったことは、とてもショックでした。でも、この空のどこかで、「拾ってくれてありがとう。家族にしてくれてありがとう。みんなのこと大好きだったよ。ずっとずっと忘れないよ。」と、見守ってくれていると思うと、毎日元氣をもらえて頑張れるような気がします。

人も動物も、永遠に生き続けることはできません。「いのち」は、いつか終わりが来ます。でも、みなさんの「いのち」は、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、そのまたご先祖のみなさんからいただいた大切な「いのち」です。この「いのち」という宝物を、できる限り長く長く守っていけるように、一生懸命生きていきましょう。いのちの重さ、大切さは、みんな同じです。ですから、お友達の「いのち」も大切な宝物です。お互いに思いやりながら、みんなでみんなの「いのち」を大切に生きていきましょう。

今週の金曜日は、由井第三小学校の「いのちの大切さを共に考える日」です。それぞれの学級で、授業を通して「いのち」について、そして、「いのちの大切さ」について、改めてみんなで考えてみましょう。

○各学年・学級の取り組み

1 年生「ドキドキ どっきんぐ」

うさぎと自分の心臓の鼓動が重なった感動を早く母親に伝えたい「わたし」。でも、玄関前で転んでしまい、心配して出てきた母親にぎゅっと抱きしめられます。母親と自分の鼓動が重なると、「わたし」の鼓動もゆっくりになっていくことの不思議さに気付いたという内容です。



初めに自分の心臓がドキドキした体験を、子供たちは生き生きと発表しました。その後先生の範読を聞き、主人公の体験を自分のことのように感じました。心臓の音が重なり合ったことを「ふしぎだな。」と思った理由をみんなで考えました。最後には自分が「生きているんだ」と感じた経験について考え、大切に世話をした生き物の話をするなど、「生きている」ことについて考える機会となりました。

2 年生「たんじょう日」

今日は誕生日。なつこは生まれたときのお母さんから聞きました。未熟児で生まれ、40 日間も保育器に入っていたこと、その間お母さんが毎日母乳を届けていたこと、心配で心配で仕方がなかったこと…。そのお母さんの話は自分に向けられた愛情にあふれており、なつこにとって何よりも素晴らしいプレゼントとなりました。



子供たちは、「誕生日」という言葉からうれしい言葉をイメージして教材に入り込むことができました。我が子を心配する母親の気持ちをしっかりと感じ取っていました。「みんなが生まれた後、お母さんから離れたけれど、みんなとお母さんは今もつながっているんだよ。」という話に、子供たちは聞き入っていました。最後には「みんな支えてもらっている。」といった感謝の気持ちを表す発言がたくさんありました。

3年生「いただいたいのち」

2年生の夏、血液のがんになったゆきは病気と闘うことになりました。病気を治すためには自分の頑張りはもちろんのこと、病院での治療、家族の支えが必要でした。治療に血液がたくさんいることを知った学校では、お願いの手紙を作り、多くの人に呼びかけました。その甲斐あってたくさんの血液が集まり、ゆきの病気は治っていきます。お母さんは「ゆきはたくさんの人から命をいただいたのよ。」とうれしそうに話しました。



子供たちは教材を静かに聞き「このままだと命があぶない」という状況を受け止め、お母さんの気持ち、クラスの友達の気持ちを想像して真剣に発言をしていました。退院できたゆきの手紙を読み、多くの人の励ましや思いやりが一番の力になることを理解しました。「助け合って生きる」ことについて、つながった命の重さを感じ取り、互いに支え合って生きることの素晴らしさに気付くことができました。

4年生「バルバオの木」

人間が地球に現れる遙か前の話。緑豊かな草原が少しずつ砂漠へと変わりつつありました。ほとんどの草木が枯れてしまい、動物たちは北へと移動を始めます。ある林では、巨大なバルバオの木だけになってしまう。鳥や動物たちがバルバオの木にたどり着くと、バルバオの木は「自分の実を食べよ、自分の葉を食べよ、自分の幹を食べよ。」と言います。ついにバルバオの木は絶えてしまいます。それから全て砂漠になり、さらに数万年の後、再び雨が降り始め、その場所に小さな芽が生まれました。



教材を読んだ後、バルバオの木が「わたしのみきを食べなさい。」といったわけについて考え、友達と意見交流をし、発表することができました。「食べること」と「生きること」のつながりに気付いて、命が自分一人だけのものではないことを深く考える機会となりました。命があるものは互いにに関わりながら必死にその命をつなごうとしていること、受け継がれていく命のたくましさを感じることができました。

5年生「おばあちゃんが残したもの」

「ぼく」が1年生のとき、おばあちゃんが亡くなりました。お祭りで金魚すくいをしたこと、悲しそうな顔をしていると大好きな新幹線が見える場所に連れて行ってくれたこと…。おばあちゃんとの思い出が今でも自分を幸せな気持ちにしてくれます。「天国に行っても見守るよ。」と言っていたおばあちゃん。今でも「ぼく」の中に生きていて、辛いときや苦しいときに「がんばりんさいよ。」と言って励ましてくれるのです。



子供たちは、おばあちゃんと「ぼく」との関係について考えていきました。おばあちゃんと「ぼく」の関わりについて、そこにある温かいつながりを感じていました。「おばあちゃんは今でも僕の心の中で生きています。」といった「ぼく」の気持ちについて深く考えました。「おばあちゃんは心の中でぼくをはげましてくれている。」「思い出はずっと忘れない。」と友達と考えを交流する中で、その思い出が「ぼく」にとって助けになり、幸せを感じさせてくれることに気付いていきました。

6年生「命の重さはみな同じ」

ひどいけがをして動物保護施設の前に捨てられた子犬。施設代表の甲斐さんは、動物病院に運びます。ところが獣医が勧めたのは安楽死でした。「命をつないでやってください。」甲斐さんは必死に頼みます。ぎりぎりのところで命を救われた子犬は、その生きようとする姿に心打たれた優しい人に引き取られていきました。



「命の重さはみな同じ」という言葉の意味を考えることから授業は始まり、子供たちは「生きる」ということを真剣に考えていました。その後教材文を読み、その主人公が発する「力強い、素晴らしい言葉」について意見を出し合い、子犬の命の危機の際に「助けずにはいられない」と思う主人公の気持ちを様々な視点から深く考えました。授業を通して「生きられることが一番の幸せ。」といった前向きで強い気持ちをもつことができました。

つくし学級「いのちの大切さについて考える日」



「いのちって、どこにあるのかな。いのちがあるところをさわってみよう。」との問いかけに、子供たちはにこにこしながら頭を触ったり、胸をおさえたりしました。子供たちなりに「いのちって何だろう」と考えるきっかけをもちました。その後3つの学級目標をクイズ形式で確認しました。その学級目標に、「命の大切さを感じる言葉を、学級目標の周りにあふれさせよう。」と投げかけ、「ありがとう」など温かな言葉で囲まれた学級目標に仕上げ、心を温かくする言葉の大切さを感じることができました。